

調査報告

地域の大学における親子参加型学習イベントがもたらす効果

—文教大学キッズカレッジプロジェクトの分析—

鹿内 あずさ・多賀 昌江・笠見 康大*・山田 晴佳・服部 裕子・小堀 ゆかり

(2018年1月9日受稿)

抄録： 本研究では、大学施設を活用した親子参加型学習イベントで地域の子どもが体験を通して学ぶ意味や意義を感じるために、初年度（今回）は、本プロジェクトに参加した保護者と子ども、および学生スタッフがどのような学び、および、どのような経験となったのかを質的帰納的に明らかにすることを目的とした。「文教大学キッズカレッジ」に参加した保護者、子ども、学生スタッフを対象にイベント終了後に質問紙によるデータ収集を行い、得られたデータは記述統計、自由記述については内容分析を行った。参加小学生は「あかちゃんの身体やその変化」「人のからだや心の成長」などを看護体験で学び、「ものを作るのが楽しい」「もっと別のものを作ることに挑戦したい」などをものづくり体験で学んでいた。小学生が自らの身体やこころ、知識や感覚などを駆使して学習することで「知る」「わかる」レベルから「実感できる」レベルにつながることで、及び、保護者が本プロジェクトを子どものキャリア教育と捉えていること、及び、学生スタッフが参加者のニーズを叶える教材やプログラム構成の必要を学だことが示唆された。

キーワード：子ども、親子参加型学習、経験、感性、大学

I. はじめに

子どもの学びは、机上の学習だけではなく、遊びや体験を通して豊かになり、五感を使った様々な体験をすることは、子どもの感性を育てることにつながる¹⁾。現代の社会環境では、子どもの遊びを屋内型で安全性の高い遊びへと変化させ、子どもの孤立とひきこもりが増え、人や地域との交流が減少している。そのため、子どもの情報や知識は増大して間接的体験は増えるが直接的体験の機会が減り、人間関係の希薄さと自信喪失や弱いこころを持つ子どもが増加している²⁾。このような環境のなかで育っている現代の若者は、他者とのコミュニケーション能力が低く、自己の明確な学びの目標や人生の目的がないまま漠然と大学まで進学して社会にでる者が増えている³⁾。そこで、地域の子どもが直接的体験を通して学ぶことの意

味や意義を感じることでできる学びの環境をデザインし、子どもの学びを地域で支える仕組みを構築する目的で大学施設を活用した親子参加型学習イベントを企画し、実施した。

II. 研究目的

本研究の目的は、大学で開催した親子参加型学習イベント「文教キッズカレッジ」プロジェクトに参加した保護者と子ども、および学生スタッフの学びと経験について、質的帰納的に明らかにすることである。

III. 研究方法

「文教キッズカレッジ」に参加した保護者、子ども、学生スタッフの経験と学びを明らかにする目的で、参加者を対象にイベント終了後に質問紙

調査を実施した。結果は記述統計を行い、自由記述について内容分析を行った。

IV. 「文教キッズカレッジ」の開催概要

1. 開催準備

本プロジェクトは大学の研究助成を受け、開催の運営に関して静岡大学「ものづくりダビンチキッズプロジェクト」にてビジネスモデルの視察を行い、情報提供⁴⁾を受けて基盤構築を行った。研究者間での打ち合わせを重ね、プロジェクトの目的を子どもの学びを地域で支える仕組み（将来的な学びの循環）を構築すること、子どもが「大学で専門家から学ぶこと」、「学びの動機付け」、および「直接的体験」が子どもの学びに必要な環境デザインの要素である、と考えた。そこで、プログラム構成の柱を大学の施設を利用しながら実際に学ぶことと研究者の専門領域である看護と造形体験とした。また、家庭でのコミュニケーション促進と学びのフィードバックが出来るようにするために、参加者の条件を「小学生の子どもと保護者が一緒に参加すること」を基本とした。開催案内は①近隣の小学校へのチラシ配布、②新聞での告知記事、③大学ホームページ、④駅、区役所、保健センターでのポスター掲示にて行った。参加申し込みはインターネットのみで受付した。

2. 開催時期・開催時間・開催方法

保護者が比較的参加しやすい土曜日とし、小学生の夏休み、冬休み期間中で大型イベントのない時期とした。プログラムの時間は2時間半、午前の部と午後の部の入れ替え制で参加者には看護体験か造形体験を希望で事前に選択してもらった。スタッフは研究者の他に大学在学中の学生が学生スタッフとして学習体験の支援を行った。また、託児を設けて子育て世代が参加しやすいように配慮した。

3. プログラム構成

プログラムの構成は、参加者全員で①大学につ

いて学ぶ講義体験「大学ってどんなところ?」、②大学施設を実際に見学して学ぶ「大学探検」、参加者が選択した③専門職体験（造形または看護）、④「学びの発表会・修了証書授与」である。専門職体験については、夏冬のイベントに両方参加する者がいた場合に体験が重複しないようにした。夏のイベントは「赤ちゃんの看護」（看護）と「パラシュートを作って飛ばしてみる」（造形）、冬のイベントは「高齢者体験と看護」（看護）と「オリジナルろうそくを作ろう」（造形）とした。

V. 倫理的配慮

参加者には、プロジェクト開始時と終了時に口頭で研究の趣旨を説明し、質問紙の記載を持って同意を得た。また、参加状況の写真撮影は、記録として活用する他、学会や北海道文教大学ホームページに掲載することを事前に伝え了解を得た。本研究は、北海道文教大学の倫理委員会の承認を受けて行った。

VI. 結果

1. 参加状況

参加者人数は表1に示した。夏のイベントでは告知から開催まで短期間となったため各参加者定員枠の15名には届かなかったが、冬のイベントでは申し込み数が定員を超えて断らざるを得ない状況となった。当日の欠席者は、各回2名程度であった。兄弟での参加や関東地方在住の保護者の参加があった。

2. 質問紙の回収率

質問紙の回収率は、夏のイベントは子ども70.3% (n=19)、保護者90.0% (n=18)、冬のイベントは子ども88.2% (n=45)、保護者95.0% (n=38)であった。参加者によるプログラム満足度は、「満足」「やや満足」と回答した保護者は合計して夏100%、冬97.3%、「やや不満」と回答した保護者は冬のイベントのみ1名であった。学生スタッフは、「満足」「やや満足」の回答者の合計

が夏冬とも100%であった。

表1 参加者数（人）

参加者	夏イベント(8月)	冬イベント(1月)
子ども	27 看護 16、造形 11	51 看護 22、造形 29
保護者	20	40
託児（未就学児）	5	11
学生スタッフ	4	6

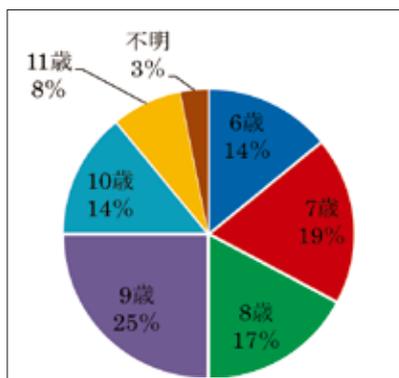


図1 参加者（小学生）の年齢

3. 子どもの学び

1) 小学生が「参加して感じたこと（図2）」

子どもが「参加して感じたこと」は、「楽しかった」が56名（87.5%）、「大学生になりたいと思った」が38名（59.3%）、「嬉しかった」が34名（53.1%）、「勉強をやる気持ちになった」が22名（34.3%）、「勉強をもっとやりたいと思った」が18名（28.1%）であった。そのなかで、子どもが参加して「楽しかったと感じたこと」は、「赤

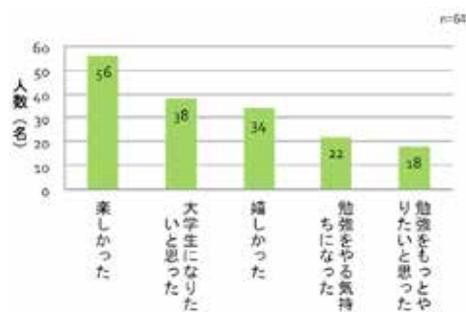


図2 小学生が参加して感じたこと

ちゃんの看護」が10名（52.6%）、「ものづくり体験 パラシュートを作って飛ばしてみる」が8名（42.1%）、「学内案内 大学のなかを探検してみよう」が7名（36.8%）であった。冬の参加者は「ものづくり体験 オリジナルろうそくをつくろう」が25名（55.5%）、「学内案内 大学のなかを探検してみよう！」が23名（51.1%）、「看護体験 おとなになるってどういうこと？」が17名（37.7%）であった。

2) 看護体験に参加した小学生が勉強になったこと

夏の体験「赤ちゃんの看護（図3）」で、参加者小学生が勉強になったことは、「オムツのかえかた」、「生まれたばかりのあかちゃんの変化」、「あかちゃんがおなかのなかにいたこと」、「あかちゃんのだっこやし方」、「お母さんのたいへんさがわかった」であった。冬の体験「おとなになるってどういうこと？（図4）」で参加者小学生が勉強になったことは、「おとしよりたいけんで耳がぜんぜんきこえなかった」、「お年よりの目がこんな風になっていたのがわかった」、「人のからだや心の成長、高れい者体験が勉強になった」、「ろうかのからだ」、「これからの成長について」、「高れい者の苦労が大変なんだと思った」、「たいけんしてうごきにくかったこと」、「高齢者の気持ちがわかったこと」、「かんどしさんがたのしそうだとおもった」、「看護師は大切な仕事だと思った」であった。



図3 看護体験（夏）の様子：
保育器内の赤ちゃんの看護体験



図4 看護体験（冬）の様子：
高齢者の疑似体験

3) ものづくり体験に参加した小学生が勉強になったこと

夏の体験「パラシュートを作って飛ばしてみる(図5)」および、冬の体験「オリジナルろうそくを作ろう(図6)」で参加小学生が勉強になったことは、「たのしくできた」「もっとつくりたいとおもった」「もっとべつものを作るちょうせんしたいとおもった」などであった。



図5 ものづくり体験(夏)の様子：パラシュートの作成体験



図6 ものづくり体験(冬)の様子：オリジナルキャンドルの作成体験

4. 保護者の学び

1) 保護者の参加動機と学び

保護者の参加動機は、「子どもが将来看護師になりたいため、看護師に興味を持って欲しい、看護師の体験をさせたい」など『子どもに専門職の体験をさせたい』が多く、次に『自由研究になる』、『(自分が)大学を見学したかった』、『子どもに大学がどういうところを知って欲しい、キャリア教育の一環となる』、『楽しそう』の順であった。

保護者がイベントに参加し「大学について新たに知ったこと」の具体的な内容について図7に示した。加えて、イベントのなかで「親子や家族の交流ができたか」という問いに対しては、夏のイベントでは94.3%、冬のイベントでは94.5%の保護者が「出来た」「やや出来た」と回答した。その理由として多く挙げた内容は「親子で協力しながら一緒にプログラムを楽しむことが出来た」、「将来大学に行きたいかを話す機会となった」、「子どもの普段知らない姿を知ることが出来た」等であった。

今後の要望や感想では「楽しかった」、「次回もぜひ参加したい」、「小学生ながらも大学のリアルな体験が出来て将来が身近になったような気がする」、「子どもにとって良い経験になった」、「子どもにとって内容が少し難しかった(低学年の親)」、「託児があって良かった」であった。

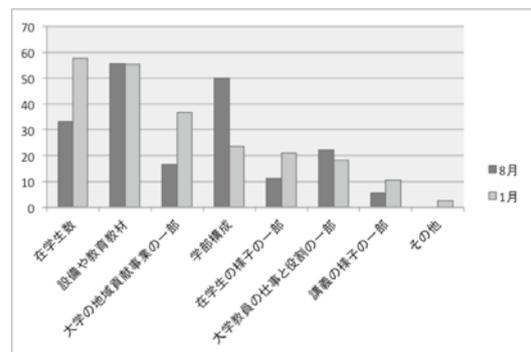


図7 大学について新たに知ったこと(保護者)

5. 学生スタッフの学び

学生スタッフの参加動機は、看護学科の学生は『子どもとかかわる方法を学ぶため』、『看護に触れる子どもの反応を知りたい』、『内容に興味がある』、こども発達学科の学生は『小学校教員になるにあたって子どもとの関わりを学びたい』、『実習に向けた教材研究をしたい』、『子どもとふれあいたい』であった。

学生スタッフがプログラムに参加した学びは、「子どもの求める楽しさを重視することと、保護者の求めることを両立することの大変さ」、「子ど

もが安全に作業出来、楽しむことが出来るかを考えることが出来た」(造形)、「子どもに何かを伝えるときには言葉遣いや表現の仕方を工夫することを学んだ」、「子ども主体で行ったことで教えがいがあった」、「子どもの時から看護体験をすることによって将来を考えるとときに役立つと思った」(看護)等、自己の学びに関する内容が挙げられた。

VII. 考察

1. 文教キッズカレッジの効果

1) 専門職体験での小学生の学び

(1) 看護体験での学び

「赤ちゃんの看護(夏)」では、看護師の役割の一部を学び、体験して感じた喜びが、将来設計をする際に、看護師という職業が選択肢のひとつとなるきっかけになると考える。また、母親の大変さを理解した小学生もおり、新生児について学ぶことは、母親の役割を理解すること、そして自分自身の成長を実感し、自尊感情を高めることにも繋がったと考える。また、「おとなになるってどういうこと?(冬)」では、看護される側として、高齢者の視力、聴力や関節可動域の低下を模擬体験した。近年では、核家族化が進行し、高齢者と接する機会が少ない小学生も多い。この模擬体験から、高齢者の体を理解し、大切にしなければならない存在だということに気付いた小学生もおり、体験したからこそ生じる感情が芽生えたと考える。また、看護師の仕事について考えるきっかけにもなり、看護される側の体験をし、対象を理解することで、看護する側の興味や関心を引き出すことに繋がった⁶⁾と考える。

文教大学キッズカレッジで小学生が体験した2つの看護体験は、実際に学んでいる大学生が学習しているテーマの内容と重なるのに加えて、看護学科の学生が授業で学ぶ際に使用するものと同じ機能を有する子ども専用の体感教材を使用した。このような疑似体験をすることは、自らの身体やこころ、知識や感覚など、自分の能力の全てを駆使して、学習することで「知る」、「わかる」レベ

ルから「実感できる」レベルにつなげていくことを可能とすると考える。

(2) ものづくり体験での学び

ものづくり体験をした小学生の学びの記述から「大学の造形教室にて実際に製作をできたこと」、「製作過程」や「製作方法」についての学びが多く、「楽しい」「作りたい」「挑戦したい」という感情の表現にもつながっていることが考察された。加えて、小学生が保護者と共に「親子で一緒に製作することの楽しさ」と「高度な造形技術の経験」によって、自己の製作意欲や造形への関心が高まるきっかけにつながったと考える。

2) 保護者の学び

保護者の多くは、「子どもに専門職の体験をさせたい」という参加動機であったが、実際に子どもと参加したことで、子どもの普段知らない姿を知ることができ、家族の交流の機会にできていた。また、子どもの休み中の自由研究になって良いことに加えて、保護者自身も大学を見学し体験に参加することで、子どもと共に大学や教員の仕事について知る機会となっていた。保護者にとっては地元にある大学を理解することに関連し、「小学生ながらも大学のリアルな体験が出来て将来が身近になったような気がする」といった、本プログラムが子どものキャリア教育になると肯定的に捉えている⁵⁾ことが考察された。

また、本プログラムの実施において、「託児があつて良かった」との感想があり、今後も託児を継続することの必要が示唆された。

3) 学生スタッフの学び

支援スタッフの在学生は、学内での講義や演習以外の活動に参加する機会を通して、「教材の工夫」や「対象となる子どもだけでなく、同席する保護者へのニーズに応える必要」に気づくなど、自身がサポート学生として役割を果たすために必要なことを考察するなど、新たな学びの機会としていたことが考察された。

Ⅷ. おわりに

文教キッズカレッジに参加した多くの小学生は、楽しさや嬉しさなど肯定的な感情を持っていた。また、大学生になりたい、という思いを抱く小学生も多く、普段、足を踏み入れることのない大学キャンパスにおいて、リアルな体験をすることが小学生の好奇心を刺激し、勉強することのおもしろさ、大学への興味をもつきっかけとなったのではないかと考える。文教キッズカレッジにおける専門職体験は、小学生の専門職への興味を発見するきっかけとなり、将来の期待を抱きながら目的をもって成長することに繋がること示唆された。

地域の大学において小学生向けの親子参加型学習イベントは、親子の交流促進やリアルな学びが出来、子どもが大学で学ぶことの実体験を通して保護者の満足度は高かった。学生スタッフはプロジェクトを通して新たな学びをしていたことから、大学生にとっても有益な学習効果があると考えられる。次年度に向けた課題がみえたことから、地域全体で学ぶ環境のデザインを充実させるプログラム構成を今後検討する必要があることが示唆された。

次年度も今回の結果を小学生の生きる力を高める生涯学習としての専門職体験企画を活用し、地域貢献の一環として活動を継続していきたい。

本研究は、北海道文教大学の共同研究費の助成を受けて実施した。

文 献

- 1) 亀岡正睦：小学校の学びを変える！授業と学習のユニバーサルデザイン。11，東京，明治図書，2014.
- 2) 深谷昌志監修 子どもの行動学研究会・レジリエンス研究会：子どもの「こころの力」を育てるーレジリエンスー。183-187，東京，明治図書，2009.
- 3) 渡部信一：ロボット化する子どもたち。10-16，東京，大修館書店，2005.
- 4) 中島あけみ他：地域が育てるものづくり文化に関する考察.産学連携学会第14回大会要旨，2016.
- 5) 多賀昌江，鹿内あずさ他：地域の大学における親子参加型学習イベントがもたらす効果ー文教キッズカレッジプロジェクトの分析ー，感性フォーラム札幌2017予稿，2017.
- 6) 服部裕子，山田晴佳他：地域の大学における専門職体験に参加した小学生の学びと経験.感性フォーラム札幌2017予稿，2017.

The Effect on Parents and Children of Learning Events at a Local University:

An Analysis of the Hokkaido Bunkyo University Kids' College Project

SHIKANAI Azusa, TAGA Masae, KASAMI Yasuhiro, YAMADA Haruka,
HATTORI Yuko and KOHEI Yukari

Abstract: We carried out this research on parent-young child participants during learning events at our university to better understand how the parent-child participants and our student staff were able to learn and experience, both qualitatively and inductively. At the end of the events, questionnaires were given out and collected from parent-child pairs and student staff for descriptive statistical analysis of multiple choice data; in addition the contents of written comments were analyzed. We found: elementary school students, after studying with their bodies (sensory touch), minds and intelligence, were able to develop from simply understanding ideas to actually feeling them deeply; parents understood this experience as being helpful in the career education of their children, that is, helping them to develop skills they will need to choose a career path in life; and student staff came to realize how the content and the presentation of this program benefited the participants.

Keywords: Child, Learning Environment Design, Experience, Kansei, University